

呑川親水公園の整備

世田谷区砧地域公園管理事務所
東 麻由美 氏

こんにちは東です。

呑川親水公園には、世田谷区玉川総合支所土木課で仕事としてかかりました。

現在は人事異動で砧地域公園管理事務所というところで仕事をしています。

今日は資料として雑誌「都市公園」に載った「呑川親水公園の整備について」という報告記事や、地域配布紙「呑川だより」などをお持ちしました。

1、呑川親水公園整備のいきさつと、設計のコンセプト

さて、呑川親水公園整備のいきさつですが、地元の陳情により、暗渠ではなく河川の形態を残して実施することで計画がたてられました。

当初、計画案を地元へ提示したところ、「自然を生かした計画としては不十分」「町並みに似合う公園に」ということで、①住宅地にふさわしい親水公園②きれいな水の復活③桜並木の保存という設計のコンセプトができました。

地元からは、「土の土手にしてほしい」「いや、土手は水があふれる」などいろいろな要望、意見が出ました。地元説明会3回、アンケート調査などを経て、川面に下りられるような構造、河床は世田谷の親水公園、次大夫堀公園などと同様「荒木田土」としました。

※雑誌「都市公園」に東さんご自身は次のように書いています。

区内の中小河川は、下水道の普及により、暗渠化され、大部分の河川は変容してしまった。しかしながら、この呑川の一区間は、地域住民の要望で河川の形態を残すことになった。下水本管も川の側道部に埋設されることになった。

昭和初期に川に沿って植樹された桜並木も保存され、その景観は区の名所地にもなっている。

区では、昭和63年度に呑川親水公園造成の基本計画を策定、計画目標を次のように設定した。

(1) 呑川及び周辺の特性を利用した公園整備を行う。

- ・湧水や動植物等の自然特性をふまえ、身近な自然(水)とふれあえる場の創出を目指す。
- ・世田谷区及び地域住民の誇りとなるような、美しい親水空間の創出を目指す。

(2)環境整備される河川環境と一体となった区道の改修整備を行う。

- ・周辺住民に親しまれ、世田谷百景にもなっている地域のシンボルの桜並木の保全を図ると共に、住民に長く親しまれるコミュニケーション育成の場を目指す。

- ・熟成された住宅地にふさわしい、安全で快適な道路空間の創出を目指す。
計画目標に基づき、基本設計に着手すると同時に、地域住民を対象に数回説明会を実施し、公園のつくりを理解してもらうため、区内の親水公園数カ所の見学会を開催、アンケート調査も行い現在の河川と公園に対する要望を把握した。

この地域の住民は30年以上住んでいる人も多く、昔の呑川を覚えていて、春ののどかさ、土手の良さなどを復活させ、川の中を歩けるようにしたいという意見と、側道の車両通行の多さから河川内に降りるなどとてもないという意見まで多種多様であった。

しかし、河川をきれいにし、河川防護柵(G.Lより高さ1.2m)がなくなれば、ゴミがあっても住民が清掃でき、生き物が棲息するのは望ましいということでは、一致していた。

この気持ちは開園して一年以上たつ今も持続しており、自主的に清掃するグループの人数も徐々に増えていく傾向にあることからもうかがえる。

○呑川親水公園の構造

施設概要

計画地：世田谷区深沢8丁目7番先から深沢7丁目1番先

延長：約870m

河川幅員：5.4m～6.0m

面積：4676.7㎡

(1)維持用水について

川底より湧いてくる水を集めるために湧水集水管を河川内に埋設し、水を最下流部の貯水槽へ送り、ポンプアップし、循環させる。

また計画地の近くに湧き水の池があり、そこからのオーバーフローした水を導水管で呑川に流水させる。

貯水槽の容量、せせらぎの流速などを配慮して設計した。平成元年着工すると、湧き水が当初の想定水量(毎分0.6~4.2リットル、昭和63・10)を大幅に上回り、毎分100~550リットルであった。

(2)護岸について

護岸は、既存のコンクリート護岸の前面に鑄御影石の石積みを行い、景観性に配慮した。建設コストが緑化ブロック等に比して高かったが、自然石の導入により、桜並木との調和や落ち着いた景観の創出ができた。

(3)水路について

生態系、湧き水の保全を主にし、川底は粘土質の荒木田土とし、生物と共生することになっている。水際は木杭と土手にし、流れの柔らかな線形を表現、植物が生育しやすいようにした。

流水部は、景石や玉石の堰・流れの蛇行等により、水の流れに変化をつけ、自然な流れを作った。堰を設置することにより、湧き水の量が最小になる1月頃でも堰ごとで水を確保できるようにしている。循環水量は昼間は毎分1.5立方メートル、夜間は毎分0.5立方メートル、せせらぎ保有水量は82立方メートルとなっている。

最下流部は人工的な造りとし、コンクリートの床に噴水3基を設置、池の部分を水が通過し貯水槽に落ちる仕掛けとなっている。貯水槽に落ちる部分に、パンチングメタルのゴミよけをつけ、落ち葉・花びらなどが入り込まないようにした。

(4)植栽について

河川内の植栽は、桜の下になるため日陰が多く、湿地であるため選定は難しかった。

日あたりの良い所には、アヤメ・ハナショウブなど、日陰には、ツワブキ・シヤガ、また土壌改良剤を植栽箇所に混入した。ススキ・ミヨウガ・スイセン・セキショウ・コガマなど多数の植栽をした。水の中にはジュンサイ・ミズユキノシタ・オモダカ・クレソンなども植えた。

春先、桜を楽しんだ後は、アヤメ等と四季が感じられるよう、側道部と河川内とで工夫をこらした。

(5)橋梁について

車輛通行の率が高い西山橋・伊勢橋については架け替え、稲荷橋・御嶽橋は高欄・橋面の改修、新桜橋・呑川橋は広場形式の造成とした。

地元要望もあり、桜の開花時期等にゆっくり佇んでいられるように、人専用の橋を架設した。デザインは桜にちなみ花びらを生かし、自然石との組み合わせにした。橋のデザインは、川の流れを見やすくし、主に自然石系とし、サイン等(呑川親水公園の説明・世田谷百景の案内)も設置した。

なお、河川に面して張り出しデッキを5カ所設置し、側道部でなくデッキから流れや桜を楽しめるようにした。

(6)側道整備について

通過車両がスピードを落とすように、色彩にてイメージハンプを実施、桜の保全も考慮して、目地透水の小舗石形状インターロッキングブロックを敷設、また植栽柵を広めにし桜の根がよく張りやすくし、河川内に張り出すような笠石ブロックを利用し、四季折々の株物を植えた。

側道幅員が広く違法駐車が多かった箇所は、植え柵を新たに設置し、現在では駐車車両もほとんど見られなくなった。

(以上、雑誌「都市公園」記事より)

2. 工事の実施

まず、川の浚渫から始めましたが、水が湧いているのを実感しました。集水管を入れ、120トンの防火兼用貯水槽に集めるようにしました。その水を循環し、公園部分の途中の石組みからも水を出すようにしました。

橋はできる限り元のものを残そうと考えましたが、壊れたりしていたので全部化粧直しをしました。橋は、すべて高欄部分の下から小さな子どもでも覗くことができるよう穴をあけてあります。それは橋の上から川の流れを見下ろしつつ、笹舟などもできるのではと考えたからです。

工事が進むうちに、できあがった部分から子どもが川の中に入って遊ぶようになりました。地元では「子どもが川の中に入ってカルガモや魚を追い回している」というハガキをもらったりし、次に述べる「呑川だより」で回答をしたこともありました。(別紙「呑川だより」参照)

工事は計画から数えて5年間かかった長い工事でした。設計をしながら部分ごとに行ったので、工事の間が開くときなどは区民の不安が大きかったので「呑川だより」というのを、平成2年12月から各戸郵便受けへのポスティングで配布しました。これは、私自身が工事途中で人事異動があったりしたのですが、呑川親水公園の開園まで配布を続けました。

側道の舗装に際し、目地透水にし、路面に盛り上がった桜の根を整備しました。目地透水はハイヒールのかかるとが食い込んだという苦情もありました。

3. 地元の受け入れ・反応・維持管理など

この川には、古くから住んでいる人の思い入れなどがあり、以前見られたミズカンナやハナショウブを植えたりした人、カルガモの観察記録を配った人もいました。また、植物を植えた人が子どもをどなりつけたりし、それにまた苦情が出るなどしました。

投げ入れられるゴミ、木の葉などの始末をするため、「有償で(区から報償費を出す)管理をしませんか」と呼びかけ、地元管理団体を作ってもらって管理協定を結ぼうとしましたが、実現しませんでした。

建設省の「ふるさと手作り賞」をいただいた件ですが、やはりこれは地元のいろいろな人が関わり、駒沢通りのコンビニの人が推薦してくれたり、「呑川だより」を置かせてくれていたお風呂やさんが推薦してくれたりして、それをうけて応募したら当選したのです。

しかし、この親水公園をめぐるイベントなどは、残念ながらその後できていません。住宅地でマンションや社宅などが多く、下町的な人と人とのつながりが少ないのは淋しいですが、ここにもともと住んでいた人はむしろ少ないので人の輪はなかなか作りづらいのかもしれない。

桜の頃には車椅子の方なども散歩してくれとてもうれしく思います。車の通行が少ないところなのでそんなこともありがたいです。

緑道も東深沢小学校までが新しい形になっていますが、できれば水のながれる開渠にしたいと思い、三島公園あたりまではパイプを入れて湧水を流せるように準備をしてあるのですが、昨今の財政難で実現は難しい情勢です。

社会科の先生が教材にしてくれたりして、子どもたち(小学生)が呑川親水公園を見に来てくれます。そこではじめて「川」というものの姿にふれるのですが、例の病原菌「O-157」事件以来、行政としては「川の中に入っても行政は責任を負わない」という姿勢です。自己責任で遊んでくださいということですね。

4. 質疑・応答

湧水の量／水害の有無／水辺の動植物について

湧水の量／ 答:最初は水循環がうまくいかず、「水道水を入れてくれ」という意見もありました。わたしたちはむしろ、水がないときは「そういうものなのだ、それが自然なのだ」と思って欲しい。湧水量の増加を望むのであれば「雨水浸透などでご協力願いたい」と考えました。

水害の有無／ 答:大雨のときには貯水槽がオーバーフローし下水に流すように作ってありますが、親水公園はまだ一度もあふれたことはありません。

水辺の動植物について／ 答：パピルス、ミズカンナを植え育てている人がいます。ミズカンナはもともと呑川に生えていたということです。カルガモなども多くの人が見守り、かかわっています。カエルも卵を産んだりして生き物は敏感に帰ってくるのだと思いました。カルガモは毎年繁殖しています。安心して卵が産めるのは都会では少ないことだと思います。

トンボはどうか／ 答：赤トンボは見かけますが、特にそれ以外では気付きません。

生物の調査は／ 答：設計段階では調査しました。モノアラガイが開園のときには確認されているので、ホタルも長い目で見れば夢でないと思うのですが、カルガモが食べてしまうので難しいでしょう。

世田谷区が設計・施工・管理をしていることについて

都ではなく、世田谷区が呑川親水公園を作ることができたのはなぜ？／

答：呑川は二級河川ですから、本来都の河川部で管理することになっていました。ですから、河川部の管理を世田谷区が受託している形です。

東京都が「呑川親水公園」をつくることを認めたのですか？／

答：途中まではそうですが、最後になって「許可できません」ということで、許可をもらわずに工事を進めました。警察にも「どうなのか」と言われましたが、「けがをしたとしても、人の命にはかかわらないような設計になっている」と話して、了解をもらいました。

下水道局ですが、設計段階で降水量1時間あたり50ミリ対応で協議に行きましたところ、「70ミリ対応」と言われ、川の断面積を70ミリ対応に変更しました。

講演の記録は以上です。

なお、その後、講演をしてくださった東様より、美しいパンフレットを会員数いただきましたので同封しました。